

敗北式

映画文学人生論

- 0211) 青年 森鷗外 参考：山椒大夫
0221) 鼻 芥川龍之介 参考：羅生門
0231) 一九二八年三月十五日 小林多喜二 参考：蟹工船
0241) 縮図 徳田秋声 参考：縮図
0251) 網走まで 志賀直哉 参考：暗夜行路

人は負けながら勝つのがよい

敗北篇五篇の作者をもっとよく理解したいと、同じ作者の別の作品をもう一篇づつ読んでみた。

山椒大夫 森鷗外 青年

羅生門 芥川龍之介 鼻

蟹工船 小林多喜二 一九二八年三月十五日

縮図 徳田秋声 黴

暗夜行路 志賀直哉 網走まで

敗北篇といっても、私が勝手に五篇を選んで、分類しただけである。作品が敗北を描いているわけではないし、作者は敗北者ではない。死後も名声を保って、読者がいる作家は成功者である。

『青年』は夏目漱石の『三四郎』に刺激された鷗外が執筆した小説で、漱石や鷗外のモデルらしき人物も登場しているが、敗北の文学者のように描かれていない。

『鼻』は漱石に激賞された。このような作品を二三十並べたら、文壇で類のない作家になれると言われ、芥川龍之介はその期待に応えた。平成の現在でも純文学の登竜門とされる文学賞にその名を冠されている。

『黴』は漱石の推薦により朝日新聞に連載された小説で、「文章しまって、新しい肴の如く候」と漱石に評された。その文章は一般読者向きではないが、文壇では評価が高い。



敗北式

映画文学人生論

『網走まで』は「白樺」創刊号を飾った短編。漱石の評は伝わっていないが、朝日新聞は漱石の意向により新聞への長編連載を志賀直哉に依頼してきた。その要望には応えられなかったが、十七年後に完成したのが『暗夜行路』である。

『一九二八年三月十五日』は『蟹工船』に先行するプロレタリア文学の問題作。警察によるなまましい拷問の様子が描かれており、後に小林多喜二が築地警察署で拷問を受け、虐殺されたシーンを読者に連想させる。死後、小林多喜二はプロレタリア文学の殉教者にまつりあげられた。

五人とも文学という芸術の作者としては成功している。では、なぜ私は彼らの作品を敗北篇に加えてしまったのだろうか。

敗者の雰囲気も漂っているからだと思う。陸軍省医務局長にまでのぼりつめた森鷗外には「不遇の人」というイメージがつきまとう。「余は岩見人森林太郎トシテ死セント欲ス」という遺言を残した。芥川龍之介は「ぼんやりした不安」から自殺し、小林多喜二は築地警察の警官に虐殺され、徳田秋声は『縮図』が検閲で執筆禁止の憂き目にあった。志賀直哉は日本の公用語をフランス語にすべきとの主張をしたことがある。

文学者には敗北がよく似合う。「人は負けながら勝つのがよい」と蒸気河岸の先生は言った。

負けながら勝つのがよいか青蛙